

編集後記

本年度も 3 年生の演習における成果を無事に報告書としてまとめることができた。関係各位に心よりお礼申し上げたい。

心理学の研究において仮説が何であるかをいうことは案外難しいものである。広く言えば、心の働きについての何らかの着想を表現したものが仮説のはずである。ところが、たいいていの場合はそのままの形では、実験であれ調査であれ、実証的に検証することが難しい。直接に見たり聞いたりすることのできない心を相手にしているのだから当然かもしれない。そんなわけで、何とかかんとかして仮説の“明確化”を図ることになる。つまりは、実際に検証可能な形に整えるのである。これはやはり苦労を伴う過程である。曖昧模糊とした観念を具体的に操作したり測定したりすることが可能なものと結びつけなければならない。しかも、その結びつきは論理的に整合的であり、誰しをも納得させるように導かれたものでなくてはならない。この過程を通して仮説がもともとの着想とは違った形や角度でまとまったりすることもなくはないのだが、それによって何らかの本質的な学びが得られることも少なくないと思う。

こうして苦労して作り上げた仮説をそのまま検証することができればよいのだが、実験研究ではしばしばこれとは違った仮説が必要になる。帰無仮説検定における仮説である。検定によって議論を決着させようとするのであれば、帰無仮説は重要である。分析において本当に相手にしているのは実はこの帰無仮説のほうなのである。そして、本来関心があったはずの仮説は、帰無仮説が棄却されたときに残るはずのものということになる。だから、研究者は自身の仮説をこの帰無仮説でないほうのものと一致するように組み立てなければならない。これを正しく言い当てるのはなかなかの難行ではなかろうか。心理学の研究でも、特に実験研究は先行研究等に基づく理論から自然と予測が導かれ、実験の結果に基づいて判然と仮説の正否が決まるかのように捉えられがちだが（そして、研究者もそのような見せかたをしがちだが）、その背後にある過程は思った以上に複雑であるように思われる。

2025 年 3 月 18 日

大正大学人間学部人間科学科

井関 龍太

r_iseki@mail.tais.ac.jp